

橋本 保*・前川文夫**： オオバタチツボスミレについて

Tamotsu HASHIMOTO* & Fumio MAEKAWA**： On the status and scientific name of a Japanese 'Langsdorffianae'¹⁾ violet

さきに伊藤栄氏²⁾はオオバタチツボスミレは *Viola Langsdorffii* Fischer ex Gingins (1824)³⁾ とは別種であるとされ、学名は *V. kamtschadalarum* W. Becker & Hultén (1928)⁴⁾ を用いるべきであると主張された。また北川政夫博士⁵⁾は最近これを支持されている。

同論文によれば、伊藤氏は 8 項目の根拠に基づき、種を分けておられる。しかし氏が *V. Langsdorffii* との相違として 1 から 4 (産地、根出花柄を欠く、草丈高く花時に茎がある、葉身の先がとがりふちは crenulate でなく不規則な serrulate となる) にあげられた諸点は、スミレ属分類の際に種の差別に認識されるべき主形質とはいえない。たとえば氏がいわれる *V. Langsdorffii* 型の根出花柄は、東京大学にある標本をみた場合、北海道札幌 (採集者不明)、芦別岳 1700 m (小泉秀雄)、岩手県外山 (菊池政雄) などで観察できる。また葉は円頭になり、伊藤氏のいわれる crenulate になるものは同上の札幌や知床半島羅臼岳 (幾瀬マサ) その他がある。茎の長短と根出花柄の有無は相関々係であるわけだが、伊藤氏が例示された標本でいどに短縮した茎を持つ個体は、上記の標本中、岩手産以外のもので観察できる。茎の長さや葉身の形、葉縁の crenation の状態は、環境の差異 (広分布種では当然気候の差の影響をうける)、生長の度合いによって変わっていることは他のスミレの種内にも例をみることができる。茎の短縮は多くの有茎種スミレにおいて環境のきびしい産地、あるいは生長の初期 (開花を伴って) にしばしば見られる。葉身の形の例は *V. betonicifolia* Smith におけるアリアケスミレとリュウキュウシロスミレとの関係、あるいはニオイタチツボスミレの花期の茎葉は丸形円頭で規則的な円きょ歯縁であるが、後には茎の上部にナガバナタチツボスミレ様の長三角状の葉をつけ、その低きょ歯縁も先端に向かって粗くなることなどを見れば理解できよう。これらは押葉標本だけでは判断を誤りやすく、各地の標本室でしばしば同定を誤って整理されている。年間を通じて栽培してみれば簡単にわかる。

次に他の 4 項目も私達を別種説に導くには力が弱い。氏の観察と記載にそのまま従った場合、托葉の先端の形と種子の大小が注意すべき点になり得るようにみえる。花

* 東京大学理学部附属植物園 Botanical Gardens, Faculty of Science, University of Tokyo.

** 東京農業大学育種学研究所 Institute for Breeding Research, Tokyo University of Agriculture.

柱の形の差は変異の中に含まれるように思う。花卉の形はカナダ、アリューシャン産などが巾広く、日本産のものは細いという傾向があるかも知れない。しかしプレートに出されている4枚の標本写真をみると、カラフト産 (TNS 180917-*V. kamtschadalorum* とされているもの) とカナダ産 (TNS 143526-*V. Langsdorfii* とされているもの) とが弁の丸味が強く、北海道産 (TNS 143830-*V. kamtschadalorum* とされているもの) とアッツ産 (TNS 180916-*V. Langsdorfii* とされているもの) が狭いのは氏の論旨とは逆になっている。それから伊藤氏の線画 Fig. 1 をみると、A から D までと E から G までは葉の *crenation* に明瞭な違いがあるように描かれているが、そのもとなった標本 TNS 180917 の写真を較べてみると、写真の葉縁は明らかに *crenulate* である。線画は *serrulate* になっている。これは種を分けようとする先入感が強く作用したためではないだろうか。他の形質の比較の場合にもこのような事が起っていなければ幸である。結局、伊藤氏のいわれる両型には明瞭なギャップがあるわけではなく、広い分布域に伴う生育環境の違いを反映した生態型の存在として捉えることを私達は採りたい。

この際の学名は伊藤氏の論文には引用されなかったが *Viola Langsdorfii* Fischer ex Gingins subsp. *sachalinensis* W. Becker⁶⁾ を採用したい。変種のランクで学名を用いるのは大井次三郎博士⁷⁾ や前記 北川博士 が記しておられることで察せられるように、目下のところ混乱を招くおそれがあるのであえて「亜種」の学名を採んだ。

もう一つ、伊藤氏の論文において学名選択の前提条件になった *V. kurilensis* Nakai⁸⁾ の除外は軽率である。なるほど *V. kurilensis* の原記載には “Sect. *Distichium*” (= *Dischidium* の誤記、キバナノコマノツメ節) とあり、*Petala flava*……と書いてある。これらが誤解の源になるわけだが、すでに大井博士⁷⁾ は東京大学にある基準標本を調べられた上で、この植物がオオバタチツボスミレであるとされ、この学名を採用された。この同定は正しい。したがってかりに別種説をとらねばならない新事実が解ったとしても、現在の命名規約のもとでは *V. kurilensis* を用いなければならない。

文 献

- 1) Becker, W. Engl. Natürl. Pfl.-fam. ed. 2, 21: 368 (1925) に出た名で、「節」の下級群として用いられた。Juzepczuk は Fl. URSS 15: 437 (1949) で Sect. *Arction* を新に設けた。これらは共に命名規約上の半裸名であるが、ここでは便宜上前者を採った。
- 2) Ito, E. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 11: 333-340 & 3 pls. (1968).
- 3) Gingins, DC. Prodr. 1: 296 (1924). 原記載では種小名 (*Langsdorfii*) の綴りに f 一つとなっている。これはおそらく誤植であろう。1) の Becker は常にこれを訂正して ff として用いている。この文中ではランクとして初めて記された方を用いたため二通りの綴りとなった。
- 4) Becker, W. & Hultén, E. Arkiv.

- f. Botanik 22 A-3: 6 (1928). 5) Kitagawa, M. Journ. Jap. Bot. 45: 123-124 (1970). 6) Becker, W. Beih. Bot. Centralbl. Abt. 2, 34: 253 (1916). 7) Okwi, J. Journ. Jap. Bot. 26: 233 (1951). 8) Nakai, T. Bot. Mag. Tokyo 36: 33 & (54) (1922).

* * * *

Since Miss. E. Ito²⁾ insisted that the species *Viola kamtschadalarum* W. Becker & Hultén should be separated from *V. Langsdorffii* Fischer ex Gingins by some points, Prof. M. Kitagawa⁵⁾ followed her in his thesis. However, we do not agree with them, because most of the characters which she presented were observed as infraspecific variations as in the case of *Viola* taxonomy. Many specific characters of "*V. Langsdorffii*" that she called also appear on Japanese plants. The difference is trivial even if her comparison indicated a taxonomic value. Consequently, we should apply the name *V. Langsdorffii* for the Japanese plants, but as a subspecies, ie. *Viola Langsdorffii* subsp. *sachalinensis* W. Becker⁶⁾.

The name *V. kamtschadalarum* can not be chosen even if it is a different species because *V. kurilensis* Nakai⁸⁾ which was wrongly quoted by Miss E. Ito is the earlier and valid name for the plant.

○印度からのセンダンに花が咲いた (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: *Melia azedarach* from Lucknow growing in Japan

1960 に举行された東京大学インド植物調査隊が Lucknow から持ち帰られたセンダン (*Melia azedarach*, L.) の種子をもらい受けて播種したところ発芽して順調に発育し、屋外で成長し現在にて約 4 m に達し、はじめて花をつけた。すなわち、インドのものが内地の露地でも生長して花をつけるまでになった。そうして、現在株が存在することを記録する。そうして、花色は白色で、日本のものと同一のものとすればシロバナセンダンに該当する。

Seeds of *Melia azedarach* brought from Lucknow to Japan in 1960 by the member of the Indo-Japanese Botanical Expedition of Tokyo University, germinated and grown well in out door and have had white flowers in the end of May.

(東邦大学薬学部)